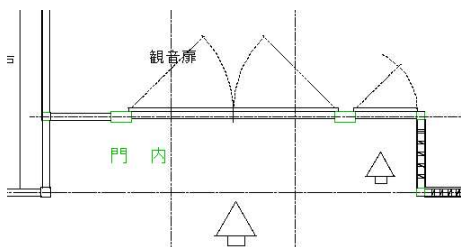
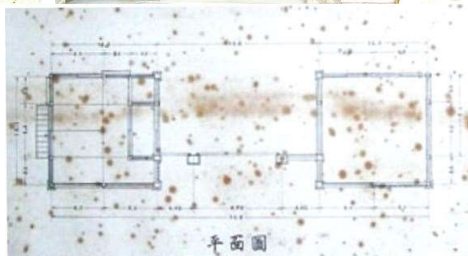


長屋門の親柱は櫓でブックマッチ

前回長屋門の構造体を支える親柱の呼称を鏡柱とっているの、なぜだろう、というレポートを書いたのだが、その結果答えは見つからなかった。

さいたま市にある長屋門の親柱は、多くが櫓材が使われている。木目の「玉杓」があり見栄えがよく堅木で、耐久性や耐湿性が高いことから、丈夫という理由だと思われる。しかし堅木であるが故に切断するにもカンナ掛けするにも大工さんは手が掛かる。

余談ではあるが櫓の木は埼玉県の県木（他県市にもある）でもある。関東



家		建具等寸法	八咫金物/金物 素材/大きさ	特徴	ブック マッチ
経井	320x150	八咫金物とセットの肘金 物 脇板	真鍮 (中 柱に乳金物なし)	両開戸	○
秋本	280x130 最小	八咫金物とセットの肘金 物	真鍮大 柱に乳金物あり	両開戸	?
戸田	310x150	なし	なし	引分け戸	△
駒崎	315x150	なし	なし	引分け戸	?
深井	318x140	八咫金物とセットの肘金 物 脇板	鉄/ 中 柱に乳金物なし	両開戸 柱に乳金 物なし	○
長谷川	290x140	八咫金物なし 肘金物	肘金物/ 鉄 柱に乳金物あり	両開戸 乳金物なし	?
伊藤	325x160 最大	八咫金物なし 肘金物	肘金物/ 鉄 柱に乳金物あり	両開戸 乳金物あり	○
金田	290x140	肘金物	なし	両開戸	○
平均値	306x144		なし		
黒門	360x270	八咫金物とセットの肘金 物 脇板あり	鉄/ 大 柱に乳金 (鉄) 物あり	両開戸	? 重く違 ってあり
前林		肘金	なし	両開戸	○

改良門鎖
鉄



花
鉄

周辺に櫓の木が多く見られるのは、徳川幕府がケヤキの木などの植栽を防災や生活用材などにと、奨励した経緯がある。地元の有力者が「ケヤキ」の植栽にいそしんだことなどもあり、立派なケヤキのある家は格式が高いとされたことが価値ある材として見られる要因なのであろう。

この親柱に使われている柱は、次の特徴が見受けられる。まず断面の形状は、五平（ごひら）の長方形の場合が多い。中には角材（等辺ではないが）の建物もある。実測した八棟の親柱の寸法は、まちまちであったが、最大ものはI家の325 x 160、最小の物はAk家の280 x 120で、平均値は306 x 144であった。この数字は一尺角ほどの材を二つ割にした材のようだ。先の大小の数字を見ると2 ; 1の割合に近い形である。この寸法は何を意味しているのだろうか。

材の儉約、幅広側を正面に向ければ、大きな柱材として見え、立派に見えるのが理由ともいえるが、そんな理由ではないように思える。

材料の寸法の関係で親柱の頭部にある冠木材の寸法と揃えることにより親柱の大きさが1尺角とすれば（市販材？）で調達もしやすいしその二つ割りが5寸であれば梁材としては標準の幅となることから、木取りや木組みがしやすい良さがある。

ちなみに大名の表門について上野の国立博物館にある旧因州池田屋敷表門（黒門）の図面を見みると、親柱は2.4尺幅の書き込みあり、奥行きは分一で当たると1.7寸位である。現在山

脇学園の施設としてある岡崎藩5万石、本田美濃守の江戸上屋敷表門の親柱は、分一で当たると約2尺幅の奥行1.6尺程である。2 ; 1の割合ではな

いが五平の材となっている。大名の表門は豪快豪壮な建物のつくりから使用材がまことに太いが、農家系の長屋門の外観や寸法の抑え方は大名の姿形を踏襲しているのだろうか？

材の大きさは親柱のサイズと両扉の建付けの収まりの関係のこともあると思われる。

さいたま市にある長屋門は両扉の開閉の方法に2つの方法が見受けられ、一つは藁座を軸受けとして開閉する方法、藁座とは地覆と頭柱に据えられてある冠木の面に木製の穴あき部材を取付そこに建具の突起部を嵌めこみ開閉できるようになっている。門の親柱・冠木・地覆の面がそろって平らになっているところに両扉の框の面が張り付けるような収まりとなっている。もう一つは肘壺金物を使用して開閉する仕組みである。この金物は大型建具を開閉するために開発された金物で、城の大手門の大扉に使われているそうである。

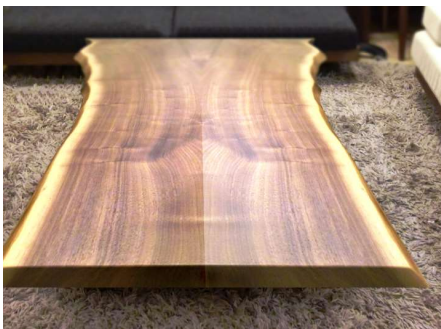
農家系の長屋門はこれほどの規模ではないが、社寺に使う金物で柱の厚み建具の厚みに対して取り付けられるような金物である。

まず建具の框に肘部を差し込み金棒で固定しその框から突き出た肘部を乳金物覆い被せ化粧する収まりとなっている。その一方の柱側にも肘部を打ち込み横から金棒で抜けないようし、肘部が柱の表面に出た部分に乳金物で化粧している。この柱に刺さる肘部の長さが親柱の半割の厚みが丁度よいことから親柱の大きさ（厚み）があるのだろうと推測する。

・この親柱の素材は樺が多く使われている。先にも振れたように、30cm角ほどの材を二つ割にし、表面の木目が美しく浮き出るまで鉋掛けなどをして仕上げている。この二つ割にした材の表面の木目は対称形ではあるがほぼ似通っている。

この似通った木目の材を二つより合わせて一枚の板状にしたものを、本を開いた状態をブックマッチと言っている。一般的には家具の一板板として使われている。

この関係を考えると左右の親柱は元は一本の木から捕れたものだから双子



の関係でもある。前回のレポに記したがこの親柱を鏡柱と呼ばれている。和名「ケヤキ」の由来は、「ケヤ」は古語で「すばらしい」という意味があり、「けやしの木」が転訛したものといわれる。また構造体を支える役目や門の威厳や美観を高める役目を担っている。こうした理由により鏡柱と名前がつけられたのか。本当の意味は？である。

この親柱の特徴は五平と二つ割のブックマッチそして扉の開閉の仕組み、名称の鏡柱とした理由は、何なのだろうか。

25.6-6 5.8-10-12

25.5.10-12

参考資料

- ・古代においては、強い木を意味する槻（ツキ）あるいは槻木（ツキノキ）と呼ばれていたが
- ・けやき（樺）の木とは？特徴やメリット・デメリット、ケヤキ材．
- ・写真： https://www.blackelephant.jp/products/list.php?category_id=20よりお借りしました